

# I. ホスピス緩和ケアを支えるボランティア活動

## 6. 学生ボランティア

### —和歌山県立医科大学附属病院緩和ケア病棟の取り組み—

月山 淑\* 畑埜 義雄\*\*

(\*和歌山県立医科大学附属病院 腫瘍センター緩和ケア部門 \*\*和歌山県立医科大学 麻酔科学教室)

#### はじめに

和歌山県立医科大学附属病院（以下、当院）の緩和ケア病棟は1999年5月に開設され、1999年8月認可病棟となったが、2006年4月以降は非認可病棟として運営されている病床数9床の小規模な緩和ケア病棟である。

開設当初は、ボランティアがいなかった。ホスピス・緩和ケア病棟にとってボランティアの存在が大きいことは間違いない。その意味は、介護力を補うマンパワーとしてよりも、「病棟」に「社会」「コミュニティー」をつくるという部分が大いだろう。ボランティアの存在が、病棟内に「季節」「つながり」「やすらぎ」を持ち込んでくれるのだと思う。

しかし、当院においてはボランティアの土壌がなく、地域性からも一般ボランティアを導入することは困難であり、病院側からも許可が出なかった。これはボランティア教育をどこが担うのかという問題、つまりプライバシー・守秘義務の問題と、緩和ケア病棟におけるボランティアの役割がきちんとしたコンセンサスを得られていなかったということだと思われる。看護師や専従医師が診療の傍ら季節行事を行ったりしていたが、2002年に看護体制が血液内科病棟との混合病棟体制となったことで看護師は多忙を極め、緩和ケア病棟入院患者に対して季節行事や茶話会を開催するような余裕がなくなってしまった。

#### 医学部学生ボランティアの導入

そのような状況下で医学部入学当初から緩和ケアに興味をもつ学生から、「病棟での活動を希望するので許可してもらいたい」「どのような手続きを取ればいいのか」という問い合わせがきた。病院課・学生課との話し合いをもち、医学部学生によるボランティアが開始されたのは、2005年5月頃である。

しかし、最初はあまり組織だった働きができず、継続性・主体性に欠けており、運営もどちらかというと学生側ではなく、病棟スタッフ側で行っていた。活動は、各患者の部屋を訪ねてご用がないかを聞いて回る方法である。前もって1カ月分の手帳を配布して用があれば、部屋のドアに訪室を希望する表示を行うようにしていたが、ほとんど使われることがなかった。ボランティア側も患者側も何をすればいいのか、何をしてもらえるのかが分からなかったのである。病棟内の鉢植えへの水やりや、メダカのえさやり、水替えなど直接患者と関われない活動が多く、辞めていく学生も多かった。

#### ボランティア活動の実際

そのなかで、病棟の窓を折り紙で折った季節のデコレーションで飾り始めたのは、保健看護部の学生であった。黙々と折り紙を折り、ガラス窓にアジサイの花やトンボが貼られるようになり、ネズミの親子が鉢植えの周りに置かれるようになった。

ある日、患者さんのところへ面会に来た孫さんが「このネズミの折り方を教えてほしい」と言った。しかし、その日の担当者は折れなかったため、次回の面会日までに調べて教えてあげられるようになっておくことを約束していた。ボランティアの学生のなかに、マッサージを少し習ったことがある学生がいて、患者さんの下肢や手指をマッサージしたところ、非常に好評であった。患者さんからマッサージのリクエストが出るとなると、身体に直接触れることであり、見よう見まねではできないため、その学生がみんなに教えるようになり、緩和ケア認定看護師による講習が始まった。これは現在も1年に数回開催されている講習になっている。

季節のイベントも最初は病棟スタッフ主体、学生ボランティアはお手伝いであったが、徐々に自分たちで計画するようになった。

2007年度、2008年度は日本財団の助成金を取得することで財源が確保され、他のホスピス・緩和ケア病棟の見学に行ったり、講師を招いてボランティアとは何か、あるいは活動のための対人援助論や方法を学ぶ機会を設けた。これを通して、かなり組織だった活動ができるようになってきたように思う。

---

## ボランティア活動の概要と特徴

現在、本年度（2009年度）の緩和ケア病棟ボランティアに登録している学生は42名、うち医学部生12名、保健看護学部生30名である。募集の方法は、4月末から5月初めに学生自身で説明会を行ってボランティアの募集を行う。さらに、病棟で専従医師と看護師長、認定看護師から緩和ケアとは何か、緩和ケア病棟の特徴、患者さんとの対応で気をつけてほしいこと、病棟スタッフとして学生ボランティアに期待することなどを説明する。その後、正式にボランティアとして病院課に登録し、ボランティア保険に加入する。

活動は、おのおの自分がボランティアに来ることができる日をその月のコーディネーターに申請して、月間予定表が作成される。これを病棟スタッフならびに患者さんに配布している。また、

イベント担当者が中心になって、1カ月に1回のイベントを行う。

学生ボランティアの特徴として、授業時間外しか活動ができないことから、週日の日勤帯での活動は困難である。授業日程によっては、可能なこともあるが、基本的には毎日9時から17時までの講義以外の時間にボランティア活動をするようになる。その代わりに、土日もボランティア活動があることもある。

---

## 活動の意義

ボランティアとして学生が活動することは、むしろ学生教育の一環としての意味が大きい。当大学医学部は2006年度文部科学省特色ある大学教育支援プログラムを「ケアマインドを併せもった医療人教育緩和医療とロールプレイを通して」で取得している。学生には、治癒を目指した治療のみではなく、医療におけるケアという概念を1年生の医学概論、3年生の病棟看護体験、5年生の選択見学、5年生の総合講義枠内で2コマの講義と4コマのロールプレイ発表ならびに臨床実習（2009年度から講義は4年生）を通して教育している。

ケアマインドをもつことは、緩和ケアに限ったことではなく、本来、医療全般に関わることである。しかし、医学の最終目標である治癒を目指せなくなった状況で、患者を見捨てない医療、その状況でも患者のQOL（quality of life）を改善する医療を提供できるかどうかに関わる医療者のケアマインドは如実に表れるのではないだろうか。

緩和ケア病棟に、終末期の患者のみが入室する時代は終わったと思う。QOLが低下すれば、それを専門的に改善・向上させるために緩和ケア病棟へ入室するという新しい概念が生まれている。在宅療養へ移行するための準備のための入室もある。老老介護といわれる状況での社会的な入院もある。そして、最終末期の看取りを目的とした入院もある。

医学部の緩和ケア病棟の臨床実習は、原則的に1日である。それでも大きな衝撃や感銘を受ける学生が少なくない。学生が臨床実習では見ること

ができない医療の現場を、自分自身がボランティアというチームメンバーとして関わっていくことの意義は大きいのではないかと考える。患者さんが退院された後で、学生ボランティアにお礼状を下されることがある。より良い医療人になるための大切な宝物、勲章になればと心から思う。

---

## おわりに

学生ボランティアは、未熟である。そして、最

長6年や4年で卒業してしまうため、個人としてのそれ以上の成熟はありえない。せめて少しでも組織として成熟して、それを継続できたらと願っている。患者さんには、満足なケアを提供できていないこともあるだろうと思い、申し訳ないと思う。しかし、このボランティア活動を通して1人でも多くのケアマインドをもった医療者が育ってくれることに大きな意味があると信じて、温かく学生ボランティアを見守っていきたい。